マリのイスラーム過激派組織「マーシナ解放戦線（Le Front de libération du Macina, FLM）」の社会的背景

坂井信三（南山大学教授）

はじめに――FLM の出現

FLM の名は 2015 年 8 月 7 日におこったセヴァレのホテル襲撃人質事件によって一般に知られるようになったが、Jeune Afrique 誌の記事[1]によると 2015 年初めから、マリ中部のマーシナ地方およびその周辺では FLM よると思われる事件が起こっていた。また、ヒューマン・ライツ・ウォッチ（Human Right Watch）が 2015 年 2 月、3 月におこなった調査にもとづく報告[2]によると、中部マリでは「マーシナ解放軍（la Force de libération du Macina）」とよばれるイスラミスト武装グループがマリの治安部隊に協力した民間人を殺害し、公共施設に放火し、住民に対する集会やビラをとおしてフランス軍、政府軍、国連の平和維持軍に協力した者は殺すと脅していたという[3]。

このように、報道によって集団の名称は、La Force de libération du Macina や Le Front de libération du Macina と安定しないが、その指導者もはっきりしない。多くの報道はアマドゥ・クーファ（Amadou Koufa）というフルベ人を指導者としてあげている。その年齢は、情報によって 40～50 代から 65 歳まで幅がある[4]。アマドゥ・クーファはマーシナ地方の中心都市モプティ近郊のクーファ（Koufa）村出身のフルベ人説教師で、パキスタン系ジハーディスト・グループのダワ（Dawa）やトゥアレグ人イスラミスト・グループ「アンサール・ディーン（Ansar Dine）」のイヤド・アグ・ガリ（Iyad Ag Gali）とつながりがあるともいわれる[5]。2013 年 1 月に武装勢力がドゥエンツアからセヴァレ、コンナまで進出したときにはその作戦に参加していて、いずれモプティを占領し、そのモスクで説教をすると誓ったという証言もある[6]。別の報道では、彼は 19 世紀のフルベ人イスラーム国家を構成していたイスラーム学者の一族に連なっており、かつてのイスラーム国家の再建を目指しているともいわれる[7]。

武装集団の構成ははっきりしない。ある報道では、戦闘員は 50 から 80 人程度、フルベ人を中心にドゴン人、ソンガイ人などを含み、アンサール・ディーンからの援軍も合流している、あるいは上「マグリブ・イスラーム諸国のアル＝カーイダ（Al Qaida au Maghreb Islamique, AQMI）や「西アフリカにおけるタウヒードとジハードの運動（Mouvement pour l'unicité et le jihad en Afrique de l'Ouest, MUJAO）」と連携しているという報道もある[8]。彼らがブルキナファソやニジェールのフルベ人と連携する可能性、あるいはナイジェリアのボ

コ・ハラム（Boko Haram）のような「新しいボコ・ハラム」になっていく可能性を危惧する報道も複数ある[9]。しかしその実態は依然不明で、一時はアマドゥ・クー~~ユウ~~ファの生死も不明とされていた[10]。

FLM はこれまで声明や刊行物を一切出しておらず、現状では FLM に関しては報道機関によるもの以外に利用できる情報がない。イスラーム過激派組織としてはおそらく萌芽的な段階で、その思想背景や軍事組織、他の組織との連携などを探ることはできない。情報があまりにも不足している現状では、FLM なる集団の思想背景や他のテロリスト組織との連携の怖れ、あるいはイスラーム国家建設やボコ・ハラム化の怖れなどについて取りざたするより前に、マリ社会におけるマーシナ地方の位置づけ、そこに住むフルベ人やその他の集団がかかえている問題など、この種の過激派集団の活動が出現してくる背景となっている歴史的・社会的条件を明らかにすることがまず必要だろう。

１．内陸デルタ、マーシナ地方の歴史的背景

マリの中央部にあたるニジェール川中流域には、幅約 100 ㎞、長さ約 300 ㎞におよぶ巨大な氾濫原、すなわち内陸デルタが広がっている。この地方は農牧水産資源に恵まれ、歴史上の諸王国の後背地として重要な意味をもってきた。マーシナという地名は、本来は内陸デルタの西部を指す地方名だったが、19 世紀初めに興ったフルベ人ジハード国家がその支配をデルタ東部にまで広げたため、現在ではデルタ全体を指す地名になっている。

多様な水文学的条件に富む内陸デルタは、古くから農牧漁業のニッチを分け合う諸民族の共住の場だったが、その生態学的な条件のために政治的な統合は進まなかった。だが 19 世紀初めに、牛牧畜に従事するフルベ人の人口増加、食肉市場の成長による家畜の資本化、統治不在の政治的混乱などの要因を背景に、フルベ人による国家建設運動がおこった。運動のリーダーとなったのはフルベ人のイスラーム学者シェイク・アマドゥで、その結果成立したイスラーム国家はディーナ（Dina、アラビア語 *al-din*「宗教」）を国号とした。

ディーナの統治上の最大の改革は、すべてのデルタ住民の定住化政策だった。その目的は、住民の居住状況を掌握することによってイスラーム国家の収入となる十分の一税の徴収を確実にすることと合わせて、生業にともなう諸集団間のコンフリクトを制御することにあった。内陸デルタは新しく建設された首都ハムダライ（Hamdallaye, *al-hamdu li-llahi*）を頂点として、フルベ人の居住単位ごとに設けられた行政区によって再編成され、それぞれの行政区はディーナに服属したフルベ人首長や、ディーナの指名する宗教指導者の権威下におかれた[11]。

ディーナはマリの歴史が経験したことのないシステマティックな統治をデルタに植えつ

けようとしたが、約半世紀後の 1862 年にセネガルから侵入したトゥクロール人スーフィー、アル・ハジ・オマルのジハードに敗れて解体する。その結果フルベ人のマーシナは政治的には内陸デルタの一辺境に後退したが、その行政組織はトゥクロール帝国の支配下でも踏襲されたので、デルタ全体としてみればフルベ人は、農民、漁民に対してその後も優越的な地位を保ってきた。

２．内陸デルタの開発

こうした状況で 1893 年にフランス軍がニジェール川中流域に入り、すでに内部分裂によって弱体化していたトゥクロール帝国を解体して、1895 年に仏領西アフリカ植民地を設定した。植民地経済の枠組みの中で地域の資源利用は開発の対象になり、市場の要求に応えて変化していく。開発路線は紆余曲折を経ながらも独立以後も基本的に継続されたので、ここでは独立の前後を連続して取り扱うことにしたい。

仏領西アフリカ植民地を支配したフランスは、内陸地方のマリを英領のスーダンやインドのような生産的な植民地にすることを目論み、無尽蔵と思われていたニジェール川の水資源を開発しようとした。それが、ニジェール川中流にダムを建設して広大なサヘルを綿花の畑に転換しようとしたニジェール川公社（Office du Niger）計画である。1932 年に始まったこの計画は、導入された新しい耕作技術と作付け品種が在来の農民のもつ知識や技術と不適合だったにもかかわらず、当局が計画の実現を強行しようとしたために結局壮大な失敗に終わった[12]。その後生産物が綿花から米に転換され、さらに 1980 年代末になって土地利用が Office du Niger の集権的な管理下から農民の自由経営に方針転換され、新たに資金と技術も導入されたことで、ようやく再開発事業は軌道に乗り始め、90 年代から 2000 年代にはニジェール川中流域の米の生産高はマリ全体の 40%に及ぶほどに成長した[13]。

こうして Office du Niger による開発は一定の成功を見たが、その灌漑事業は、実はその下流域にあたる内陸デルタの水資源に対する影響をまったく考慮せずにおこなわれたものだった。そのため内陸デルタの水稲耕作、漁業、牧畜は大きな混乱と損害を被ることになってしまった[14]。

もちろん国家は内陸デルタのこうした状況を放置していたわけではない。内陸デルタでは、1970 年代から世界銀行などの資金を導入して農業、漁業、牧畜の振興計画が実施された。しかしそれらは水という同じ生態学的資源を対象にしていながら相互にほとんど連絡のない縦割り組織によって遂行され、しかも開発計画の基礎にある行政上の地域区分が氾濫原の水利条件を無視して設定されていたために、ほとんど効果を上げることがなかった。実際、これらの開発計画のうちで米の増産を目指したモプティ米作公社 ORM（Office Riz

Mopti）がある程度の成果を上げた以外は、みな失敗に終わっている[15]。

３．家畜飼育者のマージナル化

国家的プロジェクトの影響は農民、漁民、牧畜民に等しく及んできたわけではない。国家レベルの開発政策では、一貫して食糧自給の観点から穀物の増産が目指されてきた。米の増産を目指した Office du Niger や ORM の例に見るように、その政策はある程度の成果も収めてきた。それに対して畜産に対する国家の関心はずっと低かった。

たとえば ORM は、1972 年から世界銀行の資金によって圃場を整備し、一定の入植料を支払った者に農地を貸与する事業を始めた。その結果、内陸デルタでは農民と牧畜民との葛藤が増しただけでなく、従来牧畜民が利用してきた牧草地が農地に転用される事態も起こった。こうして牧畜が農業に押されて次第に後退していく中で、畜産振興を目的とするモプティ地方牧畜開発事業 ODEM （Opération de développement de l'élevage dans la région de Mopti）は何の成果も上げることなく、結局世界銀行の援助打ち切りによって 1991 年に事業は消滅した[16]。

Droy と Ba はこうした事例を背景として、内陸デルタにおける一連の環境変化の中でもっとも被害をこうむってきたのは牧畜民だったにちがいないと指摘している[17]。かつて内陸デルタで政治的・経済的に支配的な地位にあった自由身分のフルベ人家畜所有者は、食糧安全保障を重視する開発政策の中で、次第にマージナル化されてきた。そうした中で、農民と家畜所有者のバランスが崩れ、1990 年代以降、暴力をともなうコンフリクトが発生するケースも各地で起きていたのである。

おわりに

以上の記述から、20 世紀初頭以来、農牧漁民からなる内陸デルタの地域社会は、国家および国際的な開発政策のもとで生業システムの混乱に陥り、中でも牧畜民であるフルベ人が大きな影響を被って社会的にも経済的にも周辺化してきたことが明らかになっただろう。

最初の問題にもどれば、「マーシナ解放戦線（FLM）」なる集団の出現は、このような歴史的・社会的背景をもつ内陸デルタ地方が、北部マリの政治的混乱を引きがねとして陥った混乱状態の中で起こってきた現象として理解できる。北部のトゥアレグ人軍事組織やイスラーム過激派組織は隣接する内陸デルタにも侵入しており、そのためにデルタでは中央政府の諸機関や地方政府の統治が及ばないところが出てきている。そうした地方では、地域社会に内在するコンフリクトが顕在化した場合、これを暴力的な衝突に発展させないための仕組みが機能しにくくなっているのだろう。

本報告の分析が大筋で正しいなら、必要かつ有効な対策は、利害の異なる地域の諸集団が主体となって資源を統合的に管理する体制作りを、国家と国際社会が技術的・法的に支援することだろう。実はそうした問題意識はすでに生まれていた[18]。だがそれは 2012 年春以来の北部マリの紛争のために中断を余儀なくされ、住民が混乱の中に放置される中で現在のような事態が発生してきているのだと理解できよう。

こうした事態のもとでとくに懸念されることは、資源をめぐるコンフリクトにエスニックな表象が持ちこまれることである。マリではこれまで、北部のトゥアレグ人をめぐる場面以外に社会的・政治的コンフリクトに民族的表象が貼りつけられることはなかったといってよい。だが FLM がかつてマーシナを支配したフルベ人イスラーム国家の表象を積極的にもちだし、それが上述したように周辺化したフルベ人家畜飼育者に受け入れられるなら、マリの陥っている問題状況は新たな複雑さをはらむことになりかねないだろう。

―注―

[1] “Mali: Le Front de libération du Macina, un nouveau Boko Haram? ”,*Jeune Afrique*, 2015/08/31.
[2] “Mali : La fragilité de l’Etat de droit et les abus mettent en péril la population”, *Human Right Watch*, 2015/04/15.
[3] また最近では、2015 年 11 月 20 日のバマコの Hôtel Radisson Blu の襲撃事件についても犯行声明を出したといわれる。“Au fil de l’attaque du Radisson-blu : Guerre de leadership entre mouvements terroristes”, *Le Prétoire*, 2015/11/26.
[4] “Au Mali, en territoire peul, la naissance d’un future Boko Haram”, *L’Opinion*, 2015/08/30, “Amadou Koufa : un djihadist au coeur du Mali”, *Le Reporteur*, 2015/04/30.
[5] “Composée d’anciens membres du MUJAO : La Force de libération du Macina, l’un des bras armés d’Iyad Ag Ghaly, sème la terreur dans la région de Mopti”, *Maliactu*, 2015/03/17.
[6] “Au Mali, en territoire peul, la naissance d’un future Boko Haram”, *L’Opinion*, 2015/08/30.
[7] “Mali : qui est Amadou Koufa, ce prêcheur radical qui inquiète? ”, *rfi*, 2015/07/06, http://www.rfi.fr/afrique/20150706, “Amadou Koufa : un djihadist au coeur du Mali”, *Le Reporteur*, 2015/04/30.
[8] “Au Mali, en territoire peul, la naissance d’un future Boko Haram”, *L’Opinion*, 2015/08/30 ; “Aqmi-Al Mourabitoun-Mujao-Ansardine-Mnla-Flm : Ils ont déclaré la guerre au Mali”, *L’Aube*, 2015/11/30.
[9] “Mali: Le Front de libération du Macina, un nouveau Boko Haram? ”, *Jeune Afrique*, 2015/08/31, “Au Mali, en territoire peul, la naissance d’un future Boko Haram”, *L’Opinion*, 2015/08/30.
[10] 2015 年 9 月 11 日の報道ではセグー北方の Office du Niger の入植地に姿を現してタバスキ祭の際に襲撃をおこなうよう煽動したという。“Apparition du fondateur du Front de libération du Macina dans la région de Ségou, Amadou Koufa préside une rencontre à Dogofri et projette des attaque à la veille de la tabaski”,*L’Indépendant*, 2015/09/11.
[11] Gallais, Jean, *Hommes du Sahel : espaces-temps et pouvoires, le Delta intérieur du Niger, 1960-1980*, Paris, Flammarion, 1984.
[12] Roberts, Richard, *Two Worlds of Cotton, Colonialism and regional economy in French Soudan 1800-1946*, Stanford University Press, 1996; Filipovich, Jean, “Destined to Fail: Forced settlement at the Office du Niger 1926-45”, *Journal of African History,* no.42, pp.239 -260, 2001.
[13] Dory, I. and P. Morend, “Les grands aménagements sur le fleuve Niger : atout pour le Mali ou facteur de vulnérabilité pour ses populations rurales ? ”,«Vulnérabilités des populations rurales en

Afrique », *Mondes en développement*, no. 164, pp. 57-70, 2013.

[14] Kassibo, Bréhima, "Priorités nationales et intérêt local", D. Orange et al. (eds.), *Gestion intégrée des ressources naturelles en zones inondables tropicales*, Institut de recherches pour le développement (IRD), Paris, Bamako, 2002.

[15] Dory, I. and P. Morend, op. cit.

[16] Benjaminsen, T. and Boubakar Ba, "Farmer-Herder conflicts, pastoral marginalization and corruption: a case study from the Inland Niger Delta of Mali", *The Geographical Journal,* no.175-1, 2009, pp.71-81.

[17] Dory, I. and P. Morend, op. cit.

[18] たとえば、OrangeDidier, Robert Arfi, Marcel Kuper, Pierre Morand, Yveline Poncet (eds.), *Gestion intégrée des ressources naturelles en zones inondables tropicales* , Institut de recherches pour le développement (IRD), Paris, Bamako, 2002; Cotula, Lorenzo and Salmana Cisse, "Changes in–'customary' resource tenure system in the inner Niger delta, Mali", *Journal of Legal Pluralism*, no.52, 2006.